

中央大学特別対談 スポーツで学び 次世代の人材を養成

中央大学は2027年4月多摩キャンパスに「スポーツ情報学部(仮称)」を開設予定(設置構想中)です。どんな学部が誕生し、何をどう学ぶのか。サッカー元日本代表の中村憲剛さんをお迎えして、開設準備室の渡辺岳夫室長が対談しました。

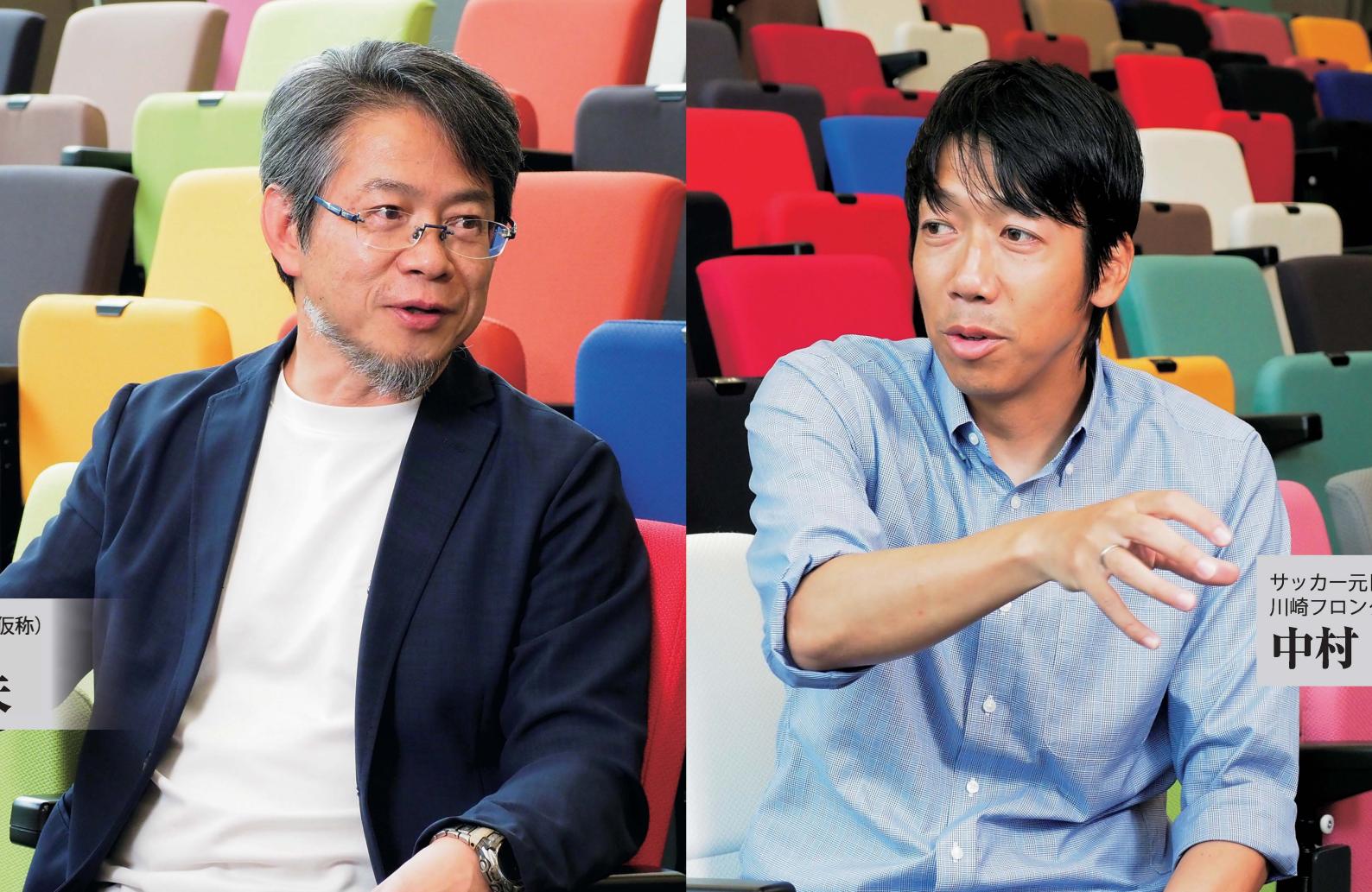
渡辺 新設する「スポーツ情報学部スポーツ情報学科(仮称)」では、スポーツそのものを学ぶのではなく、スポーツで学びます。AI(人工知能)やデータサイエンスを活用し、個々のアスリートやチームの動きをはじめ、スポーツビジネスや高齢者の健康管理の現場をデータと映像で可視化、つまり「見える化」をします。

それによって、アスリートのより良い動きや、スポーツビジネスでお客様が喜んでくださるマーケティングを考え、高齢者の健康管理にも役立てていく。スポーツを通じて、様々な社会課題を解決していくかと思います。教員数は約30人、学生は1学年300人程度の規模を想定しています。

憲剛さんは現役時代、データを取り入れたトレーニングをしていましたか。
中村 学生時代は知識が乏しかったので、非科学的なことを疑いもなくやっていましたね(笑)。川崎フロンターレに加入して数年後、GPS(全地球測位システム)端末を専用ベストに着けるように

中央大学、新学部・新学科が次々スタート

中央大学は2026年度から27年度にかけて相次いで改革を進める。26年4月、後楽園キャンパス(東京都文京区)に従来の理工学部を発展的に再編し、「基幹理工学部」「社会理工学部」「先進理工学部」の3学部を新設する。多摩キャンパスでは27年4月に、「スポーツ情報学部(仮称)」および「情報農学部(仮称)」を開設(設置構想中)するほか、経済学部も「経済学科」と「社会経済学科」の2学科4コース体制(設置構想中)に移行する。こうした改革を相次いで推進し、社会のニーズに対応した教育体制の強化を図る。



スポーツ情報学部(仮称)
開設準備室 室長

渡辺 岳夫

1968年生まれ。90年3月、中央大学商学部を卒業。現在、商学部教授。2017年11月商学部長、23年経理研究所長を歴任。25年2月、スポーツ情報学部(仮称)開設準備室長に就任



中央大学の「スポーツ・ビジネス・プログラム」での実地研修

サッカー元日本代表
川崎フロンターレ(FRO)

中村 憲剛さん

1980年東京都生まれ。2003年に中央大学を卒業し、川崎フロンターレに入社。18年間、川崎一筋で過ごし、16年Jリーグ最優秀選手賞。日本代表として、10年W杯南アフリカ大会に出場したほか、68試合で6得点を記録

なり、走行距離や最高速度、スprint距離などがデータ化されました。データが蓄積されていくと、スタッフが選手の疲労度を把握できるようになり、トレーニングのボリュームをコントロールするなど、ケガの予防に役立つようになりました。

渡辺 データと自分の意識は必ずしも一致しませんが、憲剛さんはデータが示す内容をどう捉えていましたか。

中村 わりと従順にデータを受け入れるほうでしたが、やはり一番大切なのは自分の体感です。データは明確にそれを裏付けるものと考えていました。

「現場」を大切に

渡辺 スポーツ情報学部(仮称)の学びには、3つの特徴があります。1つ目がデータをもとに課題を見つけ、分析し、解決策を社会実装するための汎用的能力を2年生までに身に付けること。2つ目がAI・データサイエンス教育の効果を最大化するため、「経験学習」を重視した教育を行うこと。そして、3つ目は「データサイエンスコース」「スポーツビジネスコース」「スポーツウェルネスコース」という3つの専門領域での学びを通じてイノベーションを起こし、持続可能な社会の実現に貢献する人材を育てることです。

こうお話しすると、「やっぱりデータ重視か」と思われるかもしれません、私たちは「現場」も同時に大切にしたいと考えています。

中村 たしかにデータから傾向は読み取れます。しかし、雨が降ったり風が

強かったり、芝に水がまかれていないくてピッチがカラカラの状態だったりすると、選手のプレーは大きく変わります。どこか痛くてコンディションが悪いと、選手はデータ通りには動けません。ですから、指導者は選手のトレーニングを毎日見ていないといけません。

渡辺 同感です。私たちはデータしか見ない人間を育てないつもりです。

中村 スポーツ情報学部(仮称)の学生たちは毎日、選手たちと触れ合い、調子の良し悪しを感じとり、そのうえでデータを確認し、照らし合わせる作業が大切になると思います。

サッカーは何が起こるかわからないスポーツです。データをもとに最終的に判断するのは選手自身で、それは「直感」と言ってもいいものです。

渡辺 中央大学には53の体育部会があって、いずれも実力はトップクラスです。学生たちは各部会でデータを取らせてもらい、現場の強化や健康管理の

ためにデータを使っていただくWin-Winの関係を構築したいと思っています。

プロとの連携も考えていきたいですね。

そうした学びを重ねていけば、例えばJリーグのアナリストとして即戦力になっていくのかなと思います。

学生たちも地域に貢献

渡辺 スポーツ情報学部(仮称)では地域や社会との交流も積極的に推進していきます。川崎フロンターレは発達障がいや感覚過敏の人に配慮し、音や光などの刺激を抑える「センサリールーム」を2019年7月に日本で初めてホームスタジアムに設置しました。

中村 川崎フロンターレのメインスポンサーを務める富士通をはじめ多くの企業・自治体の皆さんとコラボレーションして実現しました。イギリスをはじめ海外の事例も参考にしながら進めました。

Jリーグは、観客の皆様が安心して安

全に試合を観戦できるように、さまざまな施策を実践してきました。いろんな課題に対して、川崎フロンターレだけではクリアできなかったことも、みんなが集まって協力し合うことによって一つずつ解決してきました。

渡辺 センサリールームの設置は、素晴らしい社会貢献活動でしたね。

中村 観客の皆様や川崎市のためにそうした活動を行うことはプロの責務です。最近では中央大学サッカー部の学生たちもアマチュアですが積極的に地域貢献活動に取り組むようになっています。

渡辺 中央大学のサッカー部員は、廃棄されてしまう規格外野菜を近隣の子ども食堂へ届けたり、小学生向けのサッカー教室を開催したりしています。

中村 学生たちが地域や社会への貢献という発想を持って自ら行動しているのはとても価値が高いことです。

渡辺 憲剛さんたちプロの先輩が「サッカーに関わる人間は地域に貢献すべき」と実践してきた考えを受け継いでいるのでしょうか。プロの影響力は大きいですね。そのような意味では、スポーツ情報学部(仮称)の学生たちにも、実際の現場の方々とのコミュニケーションを通じて様々な社会貢献活動にも積極的に関わってもらいたい、ウェルビングな社会の実現に寄与してもらいたいと思っています。

行動する知性。

中央大学